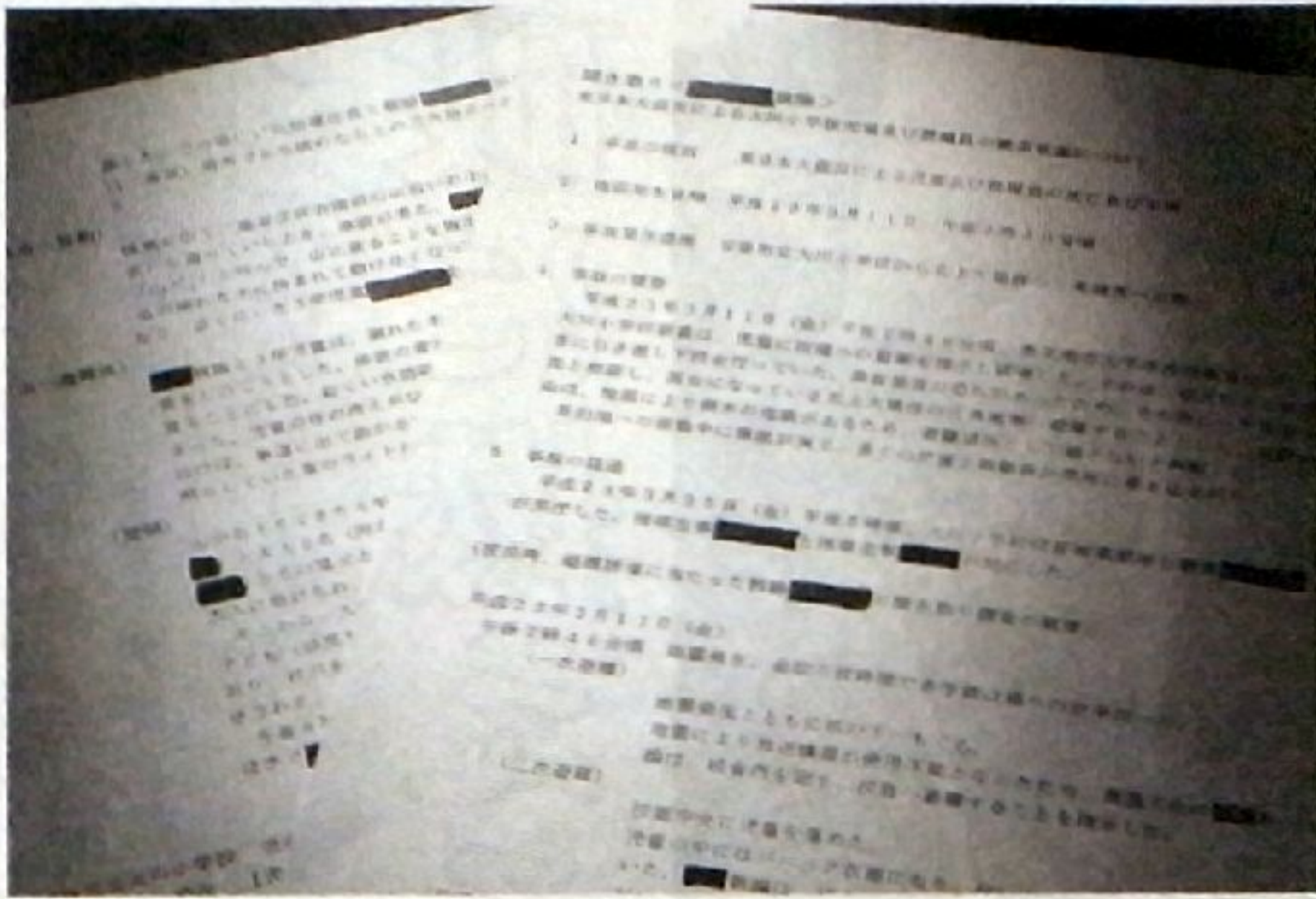


声の疑問の聴取方法

録音せずメモも廃棄

石巻市教委 報告書の9割子ども証言

東日本大震災の津波に 憶が曖昧になりがちな子どもへの聴取は、慎重に事実を引き出し、正確に記録することが求められ、市教委が5月にまとめた事故報告書は、聞き取り調査対象者28人のうち子どもが25人と9割を占めた。大人と比べて記憶が曖昧になりがちな子どもへの聴取は、慎重に事実を引き出し、正確に記録することが求められ、市教委は聴取を録音せず、証言メモも報告書作成後に廃棄するなど、



石巻市教委が男性教師の聞き取り調査を基に作成した報告書

市教委「心理負担避けた」 保護者「専門家の調査を」

河北新報社が証言内容について児童側に確かめたところ、3人とも「自分は見えていない」「後で人から聞いた」としている。ただ、震災当日に学校を訪れた一部の保護者を訪ねた一部は、避難場所を話し合う職員と担任が分担当した。「心理的な負担をかけた」（学校教育課）という理由で録音や録画は行わず、聴取中はメモもできるだけ控えたという。同課は「児童との信頼関係を重視した。その場でメモを取らなくても、報告書の中身がよければ問題ない」と説明するが、保護者の了承なしに聴取された児童もいた。

市教委によると、児童の聞き取りは市教委の職員と担任が分担当した。「心理的な負担をかけた」（学校教育課）という理由で録音や録画は行わず、聴取中はメモもできるだけ控えたという。同課は「児童との信頼関係を重視した。その場でメモを取らなくても、報告書の中身がよければ問題ない」と説明するが、保護者の了承なしに聴取された児童もいた。

報告書によると、高学年の児童2人は「『山に逃げた方がいい』と言う教頭と『津波がこきまで来るはずがない』と言う住民が言い争いをしていた」、別の1人は「住民は堤防道路への避難を提案していた」という趣旨の証言をしたとされる。

遺族の不満を受けて市教委は8月下旬、震災当日に子どもを迎えに来た保護者らを対象とする追加調査を始めた。「市教委の調査には限界がある」と懸念する遺族の中には、専門家ら第三者による調査を求める声も上がっている。

注意深く質問しきちんと記録を子どもに自発的に話してもらおう質問法「司法面接」を研究、実践する仲真紀子北海道大教授（発達心理学）の話。子どもの記憶は見たことと聞いたこと、想像したこととの区別が、大人より付きにくいのが特徴。質問するときのポイントは、できるだけ早い段階で自発的に自分の記憶と言葉で説明してもらおうこと。質問の仕方も、限られた選択肢から答えさせたり、子どもの言葉を言い換えたりすると、記憶が汚染されてしまう。

石巻市教委は録音、録画をしていないようだが、大人が注意深く事実を聞き取り、きちんと記録しないと信ぴょう性を損ねてしまい、子どものためにもならない。何十人もの子どもの話を聞いたが、丁寧に頼めば拒否されることはなかった。

その場で記録を取らないと、場面、場面を聞き手が解釈しながら質問することになる。後で記録を作る際、大人の解釈が交ざってしまう危険性もある。聞き取りは専門知識のある第三者が担当するのが望ましかった。